

ばれ、エーゲ海と黒海を結ぶボスポロス、ダーダネルス海峡の岸にある。コンスタンチヌス皇帝の名にちなんで、コンスタンチノポリスとも言われた。移ったことから始まる。この、いわば東ローマ帝国文明なるビザンチン美術のモザイクは注目すると、五世紀中期の作とされるガルプラチディア廟（ルネッタ）の「良き羊」という壁画の天井部分に唐花文様を更に柔化した独立した模様として見るべきものがある。

以上三種の唐花文様については、いずれも絵画中央部分を美的に補助する目的をもつて配されたものであるが、これが全体の調和の上に欠かせぬ役割を果たしており、いわば作品制作上不可欠な要素となっていたことは事実である（これら現在に見る唐花菱、そして割菱紋の型を伝え、紋章として完成するまでには、変遷を経る時代と共に、模様、図案、幾何学の構成要素を次々と加味したものであろう）。

このようにして武田氏の唐花菱は、時間と空間の遠い彼方より渡来した文化の跡を示すものであると言ふことができる。そして発生前、約一千年して明徳三年（一九三二）武

田氏の楯無鎧に、天文・弘治・永祿年間に信玄の馬標花割菱として用いられ、多種の唐花紋を派生させた。さらに四百年を経て、現在見る紋章として定着したものであるから、唐花菱には二千年の歴史があるとも言ふことができるのである。

回回読者招待席回回回回回回回回わたしの紋章研究回回回

祇園守りは十字架紋

福井迦留那

(福岡県大牟田市三池町郵便局前)

立花宗茂の夢

私どもの郷土筑後柳川藩主であった立花氏の家紋は、祇園守りと呼ばれるものである。ここに掲げたものがそれで、横向き二つ巴が中心となり、切竹状のものがX字形に打ち交わされ、それに纏わるように、長い葉柄めいたものが喇叭状にめぐって、銀杏の葉のようなものが三つ開き出ている。

藩祖立花宗茂の事蹟を記す『立斎旧聞記』によれば、これを立花氏の家紋に用い始めた

のは、ほかならぬ宗茂自身であったという。宗茂の実父は高橋紹運、養父は戸次道雪であるが、戸次氏の居城があった筑前立花山にちなんで、宗茂も弟直次（高橋氏を嗣いだ）も、のち立花氏を称することとなった。

戸次道雪も高橋紹運も、豊後大友氏の部将で、ともにその一族であったから、家紋も大友氏と同じ杏葉を用いていたらしい。『立斎旧聞記』には「戸次も立花も大友の氏族なれば、家の紋は襄容を用い来る所に——」とあるが、襄容というのは何の事だかよくわから

ないし、大友氏の家紋が杏葉であったことは明らかであるから、戸次も高橋も杏葉を家紋に用いていたと考えて差支えなからう。

それを宗茂の代になって、祇園守りを家紋とするに至ったわけであるが、そのいわれが『立齋旧聞記』に語られている。

宗茂は関ヶ原の役に豊太閤への義理から西軍に味方して封を失い、数年流浪の後、人物を買われて徳川家に登用され、お咄衆はなしから御書院番頭、さらに奥州棚倉城主となり、大坂陣では徳川家の軍事顧問的役割を果たしたのだが、元和六年（一六二〇）正月元日の夜の夢に、一人の老人が現われて祇園の蘇民将来の守りを捧げ、この守りをもって本国へ帰り給えと言いつつ、これを宗茂の手に渡すと見

て夢が覚めた。

宗茂は、自分は本国柳川で祇園の社に深い信仰を捧げていたので、今のは祇園天王加護のお告げであったかも知れないと思った。

そのまま何気なく過ごしているうち、その年の春將軍家から、旧領柳川本知の大部分を返し与えられる旨の恩命があったので、さて元日のは正夢の瑞夢すいむであったと歎喜し、天王御加護への感謝のしるしとして祇園守りを家紋と定めた。その本国の天王というのは、柳川に近い山門郡やまかどぐん瀬高庄せたかむらに奉祀する祇園社ぢご頭ずてん天王てんわうのことである。

この記事で、一応祇園守りを家紋に採用した来歴はわかったようなものだし、立花家の子孫も、この説明をそのまま踏襲しておられ

るようだが、著者未詳の『立齋旧聞記』所載の伝説だけで、祇園守り家紋の問題が簡単にかたづけられるものではなさそうである。

『立齋旧聞記』の記述によれば、宗茂の夢に現われた老人が宗茂に手渡したのは、祇園の蘇民将来の守りだったとのことだが、蘇民将来の守りというのは、大体、木製六方形の短い棒に蘇民将来子孫守などと記したもので、呪い棒の系統に属すると柳田國男監修の『民俗学辞典』に説明してある。

東北地方の所々に、これを奪い合ってそれを獲得した者が幸運にあたるとする行事があるそうだから、あるいは宗茂が奥州棚倉城主時代にでも、そういう習俗を見聞したかも知れないが、夢の中の老人が手渡したという蘇

八切止夫 虚妄の歴史をあばく話題沸騰の書！

われら日本原住民

日本意外史

新人物往来社刊

東京・丸の内3-3-1
振替・東京151643

価550円

日本人とは何なのか？ これまでの虚妄な日本史を完膚なきまでにえぐって痛烈なショックを与える……
原田甲斐は討幕だったと裏付けをとって示す実説『樞ノ木は残った』のほか、一読驚天動地の面白い意外史の数々をこの一冊に凝集！

民将来の守りを、如何なる理由で現在われらが見るような祇園守りの様式に成形したのかという点になると、説明は全然与えられていない。そこに盲点が存在する。

そもそも祇園社なり天王なりというものの正体からして曖昧模糊としていて、祇園というのは積尊にゆかり深い祇樹給孤獨園の略称で、祇園精舎という仏寺を想わせられるのに、それが神社の呼び名となり、牛頭天王といえは牛神で農耕関係の神かと思われのが、厄除けの性格を帯びて来ているらしい。

祇園社の本家は京都の八坂神社であり、素盞鳴尊を祀り、奇稲田姫命と八柱の御子神とを配祀した社が、平安京の東郊に鎮座していた。そこに牛頭天王も祀られるようになり、またその付近の仏刹祇園感神院も、八王子を祀る神殿を設けたりしたため、例の神仏混淆で本体がぼやけてしまい、素盞鳴尊と牛頭天王とが混線して祇園天王と呼ばれ、八坂神社も祇園社と呼ばれるにいたったもののようにある。

社の名からその祭礼や社の鎮座地付近の地名にまで、仏教ゆかりの祇園の呼称が広く用いられ、今ではそれをいぶかる人もない。

さてその祇園

天王が、その信仰や祭礼の各地への伝播に伴って漸次性格を変えさせられ、江戸品川あたりで

は河童天王となって、神輿が海中に持ち込まれたりしているし、本来疫病や虫害をはらい清める力を持つところから、厄除け開運の神とも崇められたと思われる。

アドリウスの十字架

おもしろいのはキリシタン禁制が行なわれるようになって後、耶蘇教の天主を祇園の天王にカムフラージュしたらしいことである。「甲子夜話」に次のような話が載っていることを、沼田頼輔博士が紹介されている。

鳥取の池田の分家である松平冠山に向かつて、ある日友人の松浦静山が、貴公の家に用いる祇園守りという紋章は一体どういう由緒のものか、耶蘇教関係のものではないかと尋ねると、冠山は何だかよく知らないが、わが家ではこの紋を天王から貰ったということを



立花家祇園守



中川家くるす

って、その実は王の字の上に一点があったのであろうと。

天王の王の字の上に一点を加えれば、それは天主となるわけである。

沼田博士はこの話を紹介して、この松平冠山の松浦静山に対する答えが如何にも真を得ているようだと言評し、祇園守りの紋について、

「池田家・立花家というような大名が多くこの紋を用いて居ります。これも耶蘇教徒の多く用うるアドリウスの十字架である。如何にこの紋が形を崩しても必ずXの本体を失わないことである——」
と述べられている。

私は、日本紋章学の最高権威である沼田博士の解説なり「甲子夜話」の紹介なりによって始めて、祇園守りの中央にX形十字架が見

える理由や、祇園天王がキリシタンの天主の隠れ名であることなどを教えられ、多年の疑問が氷解したような深い喜びを味わった。

なお博士の説明によれば、松平冠山の本家にあたる池田家は、もと撰津から出た有名な耶蘇教徒で、十字架の槍をきらめかして敵と戦ったり、花形十字架の紋を用いたりしており、寛永十四年（一六三七）に出版されている旗指物の本に、池田家の用いた旗の紋が「フェアリークルス」という名称で呼ばれているそうである。

池田家は祇園守りのほかにも変った十字架の紋を用いているし、冠山の説く如く、祇園守りの形は耶蘇の十字架から出た事疑いないと、沼田博士は断ぜられている。

立花宗茂がキリシタンであったという証跡の徴すべきものはないが、彼の宗家の同時代の当主大友宗麟を始め、彼の知友である諸大名にキリシタン信者が多く、最も盛んな伝道地であった肥前の国と彼の領地と

が接壤していた事などから考えて、少くともアドリウスの十字架を主軸とする紋章を家紋とするだけの親近感を、宗茂が耶蘇教に對して抱いていた事は、推論が許されるのではなからうか。

祇園守りに関連して、彼の祇園社尊崇の事蹟が喧伝されているのは、擬装の効果の現われと見られぬ事もない。

宗茂（一五六八—一六四二）の時代は、キリシタン伝道の最も盛んな時期であった。

フランシスコ・ザビエル一行が鹿児島に初めて渡来したのは、天文十八年（一五四九）のことであるが、彼等が上流階級への布教にあたって、考えた事の一つは、家の名譽や誇りの象徴と見るべき紋章の事であつたらしく、洗礼を授けるとき、十字架すなわち久留子紋を用いるよう勧告したと伝えられる。



大友宗麟ローマ字印章の略
靈名フランシスコ



黒田如水ローマ字印章
シメオンジョイスと十字架

ただし、たとえば島津家の「丸に十文字」のように、キリシタン渡来前からわが国に行なわれた十字紋も

存在するので、十字紋必ずしも久留子だと即断するわけにはいかないが、キリシタンに關係の深い人々や土地柄の場合は、擬装の仮面に惑わされる事なく、久留子紋たる正体の解明を怠ってはならぬと思う。

名曲「荒城の月」にからまるエピソードで有名な豊後竹田は、賤ヶ嶽で戦死したキリシタン大名中川清秀の子孫が、藩主として在城した所である。

その町の、清秀らを祀る中川神社に南蛮鐘というのが保存され、これに久留子の刻銘があり、中川家ではこれを朝鮮役の分捕り品だと云い伝えて来たという。

ところが、この鐘には十字架のほかに1628という数字も刻まれていて、西暦一六二八年の铸造を意味するものと見ねばならぬ。それは寛永五年に当たり、朝鮮役（一五九二および一五九七）より三十数年後のこととなるので、朝鮮役分捕りという事はあり得ず、中川家の云い伝えはキリシタン禁制を憚（はば）かた装である事が諒解される。

柳川立花家の祇園守り伝説も、いささかそれに類するカムフラージュの感じを含んでいると見るのは偏見であろうか。